名所物見の旅　其の六拾伍　早春の八甲田山と酸ヶ湯温泉

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

新青森駅のホームに到着すると、あたり一面は銀世界だった。今冬の豪雪の影響で青森市街のあちこちには大量の雪が積み上げられて残り、その上に今朝降ったばかりの新雪が覆っている。バスに乗って酸ヶ湯温泉まで来て見ると、四月に入って一週間が過ぎたというのに、温泉宿は二階の屋根に届くほどに積もった雪に囲われていた。酸ヶ湯から先の十和田湖への道路はすでに除雪を完了して開通していたが、道路の両側にも見上げるほどの高い雪の壁が続き、バスから降りた観光客らはあまりの雪の多さに驚きの声を上げている。

酸ヶ湯から正面に見える八甲田大岳（1,584m）は陽の光を受けて真っ白に輝き、山頂付近にはまだ樹氷が残っているような真冬の装いである。例年なら樹氷の見頃は二月から三月半ばまでで、それ以降は氷が落ちて黒い樹肌が見えてくる。しかし今年と同じく豪雪だった昭和59年に訪れた時、四月に入っても山の頂にはたくさんのスノーモンスター（樹氷）が林立していたので、今年も期待できるかもしれない。その夜は久しぶりの酸ヶ湯に浸るのもそこそこに、翌日の登山に備えて早めに就寝した。

仙人岱から夜明けの八甲田大岳。今冬はたいへんな豪雪だった影響で、八甲田連峰は四月になってもまだ冬山の装いであった。

迫力なき樹氷群

明けて翌朝、星が瞬くなか3時半に宿を出てスキーにシール（アザラシの毛皮の滑り止め）に着け、雪に覆われたブナの森を登りはじめた。朝早いせいか人の気配はなかったが、雪の上には動物の足跡があちこちにある。五十分ほどで樹林帯を抜け硫黄沢の広い急斜面に出ると、もう懐中電灯の必要がないほど明るくなってきた。遮るものがない硫黄沢には強風が吹き降ろしていて、春山ののんびりした雰囲気など微塵もなく、真冬の山となんら変わらない。

出発から一時間半、広い樹氷原の仙人岱に出て日の出を迎えた。しかし樹氷自体はところどころ黒い部分が見えて、写真を撮ろうにもあまり絵にならない。八甲田小岳の山頂付近には数多くの真っ白な樹氷が並んでいるのが遠望できるので、日が高くなる前までに頑張って登ることにした。小岳の急斜面にかかると、樹氷の周辺には大きな窪みがたくさんあって、スキーがそこに落ち込むと、脱出するのに大変な労力を要する。高度を稼ぐうちに、真っ白い樹氷が多くなってきた。四月半ばにこのような樹氷が見られるのは珍しいだろう。しかしなんだかいつもと様子が違うように思いながら登っていったが、はっと、あることに気が付いた。樹氷がみなずんぐりとして、小さいのである。よく観察してみると、大量の積雪で樹氷自体が雪に埋まり、上部だけが顔を出しているので高さが例年の半分ぐらいしかない。とてもアイスモンスターと呼べるような迫力はなく、雪仏が並んでいるような風情だ。とりあえず小岳山頂まで登って、雪坊主を前景に最高峰八甲田大岳をカメラに収めようとするが思ったような構図にならず、早々に撮影をあきらめてスキーを楽しむことにする。

八甲田小岳の山頂に向かうスキーヤーとスノーボーダーたち。小岳山頂付近の樹氷はまだ氷が落ちていなかったが、樹氷は雪に埋まって背丈が例年の半分ほどしかない。

昼近くになると春山の強烈な日差しに気温が上がって雪が融けはじめ、スキーの滑りが極端に悪くなった。急ぐ旅でもなく、のんびりとスキーを背もたれにして昼飯を食べていると、スキーツアーのグループが井戸岳の鞍部を越えてやってきた。ベテランガイドが引率するこうしたツアーは年々盛んになっていて、山岳スキーの連中に混じってスノーボードで参加している人も多い。彼らはスノーシュー（西洋かんじき）で登り、スノーボードで滑り降りるのである。少なくとも樹氷帯の登りに関しては、スキーよりもスノーシューのほうが歩きやすそうにみえる。天気が良かったおかげで午後も八甲田の大雪原を彷徨し、酸ヶ湯に滑り降りたのは五時近くになっていた。それでも夕暮れにはまだ時間があり、つくづく日が長くなったことを感じた一日だった。

元気な老スキーヤーたち

二日間悪天で宿に足止めされたあと、五日目は高気圧が青森方面へ移動してくるという予報に、朝八時過ぎ吹雪を突いて出発した。稜線まで登ると悪天で吹き付けられた氷片（エビの尻尾）が、岩肌にびっしりとついている。朝からずっと黒雲が走っていたが、十時近くになって雲はとれ予報どおり快晴となった。しかし気温は氷点下をかなり下回っているようで、この時期としては非常に寒く感じる。今回は八甲田大岳山頂を目指して、強風によってカチンカチンに磨かれて凍りついた大斜面を登行した。傾斜のきついアイスバーンではシールの効きが悪く後ろに滑ってしまうので、スキーアイゼンを装着した。出発から二時間半で、強風が吹き荒れる大岳の山頂に到着。スキーのシールとアイゼンを外し、そこから井戸岳鞍部へ一気に滑降する。しかし楽しいはずの広大な大斜面の滑降も、強風と凍った斜面にわたしの技術ではかなりの緊張を強いられた。鞍部にある大岳避難小屋で休憩しようとするが、小屋の戸が凍り付いて開かない。仕方なく、小屋の脇の風が当たらない場所で立ったままクッキーと水だけの昼食をとった。そこへスキーをザックに括り付けてスノーシューを履いたおじさんがやってきて、やはり立ったまま半分凍ったようなおにぎりを食べ始めた。弘前から来たというこのおじさん、どう見ても還暦をとっくに過ぎたような年である。そこへまたひとり、大岳から滑り降りてきたのは七十過ぎの単独行者で、わたしは年季の入った元気な爺さんたちに囲まれ圧倒された。思えばここ八甲田は、百歳を超えてなお現役の山岳スキーヤーだった三浦敬三（三浦雄一郎の父）のホームグランドだ。老スキーヤーなどちっとも珍しくない土地柄なのだろう。

真っ白に凍りついた大岳避難小屋から酸ヶ湯を目指して滑り降りていくと、中腹から下は午後の陽射しをいっぱいに浴びて、この時季本来の春山らしい雰囲気に溢れていた。樹林にはウグイスやミソサザイの囀りとクマゲラのドラミングが賑やかで、早春の山の素晴らしさを満喫できたのだった。

東北の名湯・酸ヶ湯温泉

八甲田登山の基地となる酸ヶ湯温泉は、江戸時代から農閑期の湯治の宿として賑わい、昭和29年（1954）に国民保養温泉地第一号の指定を受けた名湯である。わたしは三十年近く前に初めて酸ヶ湯のヒバ千人風呂に入ったときのことが、いまでも忘れがたい思い出となっている。そのときは夜行で来たまま登山とスキーを楽しんだせいで夕食後ぐっすり寝てしまい、気が付いて風呂に向かったのは十一時近かった。薄暗い脱衣所から戸を開けると、もうもうとした湯気で中はほとんどなにも見えない。ひとりでのんびりと総ヒバ造りの大きな湯船に浸っていると、遠くにうっすらと女性の姿が目に入った。わたしはびっくりして、間違えて女風呂に入ってしまったと思いあわてて出ようとしたが、反対側の湯瀧に打たれているのはどう見てもおじさんだ。わたしは何がなんだか分からずに混乱して、酸ヶ湯が混浴温泉だと気がつくまで多少の時間を要したのだった。

酸ヶ湯には「熱の湯(あつのゆ)」、「四分六分（しぶろくぶ）」、「冷の湯」、「湯瀧」があり、湯治の場合はそれぞれの湯にこの順序で浸り、最後にまた「熱の湯」に入ったあと布団で休むと効能があるという。最近は女性専用の時間も設けられ、混浴に不馴れな女性にも入りやすくなった。また東北ならではのおおらかな混浴の伝統をいつまでも守ろうと、著名人らによって混浴保存会ができたと聞いた。

酸ヶ湯を愛した芸術家

酸ヶ湯を愛した文人墨客は井伏鱒二や深田久弥、岡本太郎らが知られ、なかでも青森出身の世界的芸術家、棟方志功（1903～1975）はその代表格といえる。志功は毎年夏になると家族とともに酸ヶ湯を訪れ、酸ヶ湯の館内には彼の描いた八甲田山や独特の力強い書などが展示されている。

志功と酸ヶ湯の結びつきは昭和初期に遡り、鹿内辰五郎（1880～1965）とのエピソードがよく知られている。鹿内は十代の頃から湯治客の荷を運んだり山案内をして酸ヶ湯で働き、明治35年の陸軍歩兵連隊雪中行軍遭難事故のときには救助活動にも参加した経験を持っている。兵役後も酸ヶ湯で働き、いつも勲章を胸につけた軍服姿でバスが到着するとラッパを吹いて客を迎え、山では腰に差した横笛をよく吹いたという。八甲田に精通する鹿内はいつしか八甲田の仙人と呼ばれるようになり、酸ヶ湯温泉の名物となった。昭和4年、志功が鹿内仙人と八甲田に登ったとき、仙人の吹く笛に誘われて、両翼に日の丸のような模様のある鷹が頭上を廻り始めた。すると仙人は「志功、あれは神の鷹だ。神の鷹を見れば偉くなる。世界一になるぞ」と言い、それを聞いた志功は地べたにひれ伏して手を合わせ、鷹を拝んだという。

結果どうり、志功は世界に認められる芸術家になったわけだから、この話まんざらバカにしたものでもないだろう。わたしは八甲田を訪れるたびに、上空に神の鷹は飛んでいないかと気にはしているのだが、まったくその兆しのないまま三十年が経ってしまった。

四月半ばになってもまだ雪に埋まるように佇む酸ヶ湯温泉。昔は農閑期になると布団や鍋釜を持ち込んだ湯治客で賑わい、廊下や屋根裏までいっぱいになったという。

井戸岳をバックに、雄大な八甲田の雪原を歩くスキーツアー隊。八甲田山では毎年六月までスキーやスノーボードを楽しむことができる。